



アリスギアマガジン 読者参加型シナリオ

霞ヶ浦のサンセット

—アリス・ギア・アイギス外伝—

第九話 「望まれるということ」

《パンフレットを受け取る》を選択

◆職員室

優陽 「ありがとございます。あたし、筑波に行ってきます！ 僅かでも、

可能性があるのなら！」

優陽は、菜澄那から筑波にある高校のパンフレットを受け取った。

菜澄那 「フフ。稲葉さんならそうするって思ったわ。頑張ってきて」

優陽 「はいっ！」

優陽は元気よく返事した。

漣音・調 「失礼します！」

その時、漣音と調が勢いよく入ってきた。

湊音

「あ、あのっ！」

調

「私達も、優陽と一緒に見学しに行っても良いでしょうか？」

優陽

「えっ!？」

どうやら、二人は職員室の外で聞き耳を立てていたらしい。

菜澄那の席は廊下側だったので、壁に耳を付ければギリギリ聞こえる範囲だった。

菜澄那

「草野さんと櫻井さんの志望校は『土浦第一女学院高校』でしたよね？」

二人の気持ちを察していた菜澄那だったが、ちよっぴり意地悪く聞いてみた。

湊音

「あ、いえ。今は志望校を絞ってしまうより、もう少し可能性を広げて

みるのも良いかなと」

菜澄那 「フフ、それもそうね。では、学校見学ということで先方には伝えてお

きますので、行ってらっしゃい」

三人 「はいつ！」「」

三人は元気よく返事をした。

◆筑波研究学園都市

三人は制服姿でバスと電車を乗り継ぎ、筑波研究学園都市内の駅までやって来た。

改札を抜けたところで、キョロキョロと辺りを見回した。

湊音

「進藤さん、だっけ？ 迎えに来てくれるの？」

優陽

「うん。菜澄那ちゃんはそう言ってたけど……」

調

「あ、あの人かな？」

いち早く気がついた調に、他の二人も視線を合わせる。すると、その先にスーツを着た若い女性の姿があった。

女性

「稲葉さんに、草野さん、それに櫻井さん、ですか？」

優陽

「は、はい！ 稲葉です！」

漣音

「草野です」

調

「櫻井です」

近づいてきた女性に対して、順番に挨拶をする三人。それぞれ名乗り終えると、同時にペコッと頭を下げた。

女性

「本日は筑波までご足労頂き、ありがとうございます。本日は、私、進

藤がご案内させて頂きますね」

進藤と名乗る女性は、恭しく頭を下げた。

中学生である三人は、こんなに丁寧な扱いをされたことがない。あまりのVIP待遇に、三人は恐れ多い気持ちとともに、何か裏があるのではないかと勘ぐってしまう。

進藤 「向こうに車を用意しています。学校に着いたら、私達の高校のご説明

をさせて頂きます。それでは参りましょうか」

優陽 「あ、はい！」

先方が一言話すたびに、ペコツと頭を下げてしまう優陽。

釣られて、滯音と調も頭を軽く下げる。

そんな初々しい様子の三人に女性はクスツと笑うと、車に向かって先頭を歩き出した。

◆大学付属筑波研究学園高校 応接室

進藤 「……でしばらく待機してもらえますか？」

進藤はそれだけ告げると、高校の施設を一通り見学した三人を応接室へ通し、一旦席を外した。

優陽 「……………」

滯音 「……………」

調 「……………」

三人とも、言葉を失っていた。

滯音 「す、凄かったね、設備というか、機械というか……」

調 「ああ。まさに、アクトレスのための最先端技術が揃っているって感じ

だったな」

茨城シャードが誇るサイエンスシティ、筑波研究学園都市。

ここには最先端の技術、とりわけアクトレス関連の研究機関が揃っていた。

その中にある大学付属の高校だけに、設備も最先端のものばかりだった。

漑音

「生徒にはアクトレスもかなりいるんでしょ？」

優陽

「うん。茨城シャード内でも、トップレベルの撃墜率なんだよね」

調

「そりゃあ、これだけの設備が整っていれば、なんの心配も無くアクトレスになれるよな？」

実際にこの学校は全寮制だが、行政からの補助金もあり、アクトレスになって研究に協力することで、授業料を含めた全額が免除となる。

心置きなく、アクトレス業務に打ち込める環境が揃っていた。

漑音 「優陽はここの高校、考えてなかったの？」

優陽 「あたしは東京シャードしか考えてなかったし、そもそもここの偏差値

を考えると……」

調 「まあ、そうだよな」

優陽 「あ、しべちゃん、今、酷いこと言った」

ぷーと膨れる優陽。

漑音 「でも、優陽に声が掛かったんだよね？ しかも、適性検査に不合格

だった優陽に」

優陽 「ううゝ 改めて言われると、ちょっとへこむよ……」

漑音 「あ、ご、ゴメン、優陽……」

優陽 「ううん。でも、漑音ちゃんの言うとおりだよな。テスト生だって言っていたけど、本当にあたしで良いのになって。少なくとも、偏差値は全然足りてないのに」

調 「この学校としては、偏差値以上に優陽のエミッション値が貴重な研究

素材になるんだろう。ただ、少し引つかかるんだよね」

漣音 「だよね。エミッション値だけなら、優陽以外にも同じような値の人はいるだろうし」

調 「そうなんだよ。だけど優陽に声が掛かった。その理由を知らずに話だけ進むのは、少し気持ちが悪い」

優陽 「……………」

漣音と調が自分のために心配してくれている。

こうして付き添ってくれたことが心強くて、そして嬉しかった。

漣音 「そうだよね……やっぱり、裏に何かあるよね？」

優陽 「あたし、解剖されたりするのかな？ あはは」

漣音 「ま、まさかね……」

冗談半分で話す優陽の言葉を本気にする澤音。

澤音は普段グイグイと周りを引っ張るタイプではあるけど、時々こうして臆病になる。

そんなところがカワイイと、優陽も調も思っていた。

進藤

「失礼します」

ガタツと揃って立ち上がる三人。

進藤

「ああ、座っていてください」

進藤は真剣な表情で立ち上がった三人を、クスッと笑いながら制した。

進藤

「ところで、ウチの高校、どうでした？」

調

「どう、と言われましても……」

漚音 「凄い、という言葉しか出てきません」

具体性がない意見ではあったが、中学生らしい答えだと進藤は満足していた。

しかし、本命である優陽の答えがなかったので、改めて促した。

進藤 「稲葉さんは？」

優陽 「あ、あの、あたし、もう、なんか胸が一杯で……」

胸に手をあてながら、まとまっていない感想をほぐしながら話し始めた。

優陽 「机に設置されているパーソナルモニターとかもカッコよかったし、更

衣室のロッカーも全員分あって大きかったし、食堂も美味しそうなのがたくさんあって、ここに住めますね！ えへへ……」

漚音 「優陽!？」

調 「ああ、すみません。『ここに住めますね』は優陽の最高の褒め言葉で

すので……」

突拍子もない感想に、澤音は驚き、調はフォローした。

進藤 「……クスッ」

どうやら気に入ってもらえたようで、まずは良かったと進藤は思った。

優陽 「でも……エミッション値が足りないあたしが、入学しても良いのか
なって、思いました」

声のトーンを落とし、優陽は正直な思いを吐露した。

優陽 「あの！ テスト生って言われたのですが、何をするんですか？ 高校

生になるのとは違うものなんですか!？」

漑音

「えっ?」

調

「……………」

これこそ、優陽が一番聞きたい事だった。

実は今まで、この学校に入学する前提で話が進んでいたわけではない。テスト生という言葉から考えると、アルバイトのようなものという可能性もある。

そして、優陽がそう考えていたことを、漑音と調は気づいていなかった。

進藤

「いいえ。もちろん、この学校の生徒として入学して頂きますよ。他の生徒と同様に三年間通って頂きますし、大学付属の高校なので、内部試験に通れば、上の大学に進むことも可能です」

優陽の心配は即座に否定された。

だけど、それならそれで、余りにもおいしい話すぎて、裏があるのではないかと勘ぐってしまう。

優陽

「あ、あの！ あたしの偏差値、ご存じですか!? とても、この高校に見合うとは……」

進藤

「我が校には特別進学コースとアクトレス養成コースがあります。特進コースは、より難易度の高い大学受験に向けたコースになっていますが、アクトレス養成コースは上の大学に進学するための最低限の学力があれば問題ありません」

進藤は、容赦なく優陽の疑問をねじ伏せた。

ところが、今度は滯音が率直な疑問をぶつけた。

滯音

「上の『筑波学園大学』も、相当ランク高いですよね？ 最低限の学力だって、相当頑張らないと厳しいと思いますか？」

進藤

「世間的にはそうですね。だけど、内部生からの進学試験は、きちんと授業を受けていればそれほど難しくはありませんよ。毎年、ほぼ全員が進学していますので。まずはアクトレスとして集中して頂ければと思います」

三人は、疑問に思っていたことを次々と進藤に浴びせた。

進藤は全てが想定内とばかりに、率直に回答した。

そして……

調

「そのアクトレスですが、優陽のエミッション値で本当に良いのですか？」

調はズバツと核心を突いた質問を投げた。

下手をすれば親友を蔑むような質問だが、そこはお互いの信頼関係もあり、むしろ優陽としても一番聞きたい質問だったので、調に感謝を

していた。

進藤

「はい、もちろんです。だからこそ、お声を掛けさせて頂きました」

真剣な表情の三人に対して、極めて真摯に進藤は回答した。

優陽

「なぜ、あたしなんですか？ エミッション値だって、あたしと同じく
らいの人はいると思いますし、あたしより勉強できる娘だって、いる
と思います……」

下手をすれば『おいしい話すぎて疑っています』という言い回しにも
聞こえなくはない、危険な質問だった。

だけど、そんな質問にも、三人が納得せずにはいられない答えが用意
されていた。

進藤 「……拝見させて頂いたんです。あなた方の映画を」

三人 「「えっ!?!」」

あまりにも意外な答えに、三人は驚きを隠せなかった。

進藤 「私の本来のお仕事は特別推薦枠を設け、研究機関と連携して将来性有

望な生徒を探し出すことになります」

それまで薄らと笑顔を浮かべていた進藤だったが、少しだけ表情を引き締めた。

進藤 「こういった仕事をしておりますので、茨城シャード内の様々な中学校

に足を運ぶ機会が多くあります。霞ヶ浦の裏中学を訪れた日がたまたま文化祭の日でして、映画を拝見させて頂いたのです」

優陽 「『霞ヶ浦のサンセット』を、ですか？」

進藤 「はい。本当は数分だけ観させていただこうと考えていたのですが、気がついたら最後まで見てしまいました。とても感動しました」

感動した、と率直な感想を言われて、くすぐったい三人。

そして進藤は、手にしていたファイルを広げ、数ページ分捲った。

進藤 「そこで早速、あなた方についての詳細をリサーチさせて頂きました。

その中でも特に稲葉さんが、この学園都市内の研究対象として合致することが判明しました」

優陽 「それが伊藤先生が言っていた、エミッション値が低い人でも扱えるギ

アの研究、ですか？」

進藤 「はい。その通りです」

進藤は広げていたファイルを閉じ、優陽を真剣な表情で見つめた。

進藤 「但し、一つ伝えておかなければならないことがあります。それは、稲

葉さんにとって、とても辛いことかもしれません」

湊音・調 「「え……?」」

優陽 「……やっぱり、そうですね。なんとなく、そうかなって思っていました」

驚く湊音と調に対して、優陽は一人だけ冷静だった。

調 「どういうことだ?」

調は優陽に向かって質問したが、回答は進藤が行った。

進藤 「あくまで、エミッション値が低い人でも使えるギアの開発です。エ

ミッション値が高いアクトレスのように最前線で活躍できる可能性は極めて低いのです。そのため、テストが順調に進んだとしても、基本

的には後方支援や安全な宙域の調査が任務の中心になるかと思っています」

滯音

「そ、そんな……」

調

「クッ……」

アクトレスになりたいと、優陽はいつも二人に話していた。

だけど、進藤が話すアクトレス像は、優陽が描いていたものとは著しく違うものだろう。

そう感じていた滯音と調は、いたたまれない想いに苛まれていた。

進藤

「だからこそ、この実験の成否はアクトレスへの情熱が重要だと思っています。それがなければ成功率も低くなるし、何よりも続けることが難しいと思います」

調

「そうかもしれないけど……それって、あまりにも残酷過ぎる……」

滯音

「優陽……」

当の本人よりも、親友二人の方が感情を乱していた。

それを察した優陽は、両脇で肩を落としている親友達の手を握った。

優陽

「滯音ちゃん、しべちゃん。あたしのために色々と考えてくれて、ありがとう……あたし、二人がいてくれて本当に良かった」

優陽は握っている二人の手に、ギュッと力を込める。

優陽

「でもさ、可能性が全くないあたしに、僅かな光が射したんだよ？　ゼロがイチになったんだよ？　それって、凄いことじゃない!？」

そして二人の顔を見て、優陽は笑顔を浮かべた。

優陽

「あたしが思い描いていたアクトレスとは少し違うかもしれない。けどさ、そんなアクトレスがいたって良いよね!」

だけど、その笑顔には強がりや少し含まれていることを、付き合いの長い二人の親友は理解していた。

それでも、優陽にアクトレスになれる可能性が生まれたことは、歓迎すべきことだとも思っていた。

だからこそ滯音は進藤に向き直り、改まって質問した。

滯音

「あ、あの、わたしもこの学校を志望したいのですが……」

優陽

「えっ!? 一女じゃないの!？」

滯音

「もちろん一女も受けるけど、ここもチャレンジしたいなって!」

調

「私も志望します。受験案内の資料を頂けますか？」

滯音と調は、優陽を追って志望校を変えるつもりだった。

但し、一般入試で入るには、今の学力では厳しいと二人とも思っていた。

進藤 「ありがとうございます。ただ、お二人とも映画制作の実績と学力面を

合わせて考慮すれば、十分に推薦枠に入る資格を有していますので、
改めて資料をご用意し、学校の方に送付させて頂きますね」

澤音 「あ、ありがとうございます……」

二人は心底ホッとした。

仮に優陽がこの高校に入りたいと思っても、今から志望校を変えて受験勉強することは不安でしかなかったからだ。

進藤 「できれば草野さんと櫻井さんにも是非入学していただきたいと思って

おります。稲葉さんの友人として、重要な役割も果たしてもらえると
思っておりますし、それに……」

進藤は澤音と調の目を交互に見て、そして二人をくすぐるような話を
続けた。

進藤

「もし、再びあのような映画を撮影する機会があれば、この学園都市の施設を使うことで、もっと素敵な作品を作ることが可能ですよ？　個人的には見てみたいですけどね」

進藤はお茶目に笑って見せた。

進藤

「是非とも三人揃って、この学園に入学して頂きたいと思っています」

座ったまま、軽く頭を下げる進藤。

進藤

「もちろん、今すぐにお返事を頂くとは思っておりません。重要な進路ですし、ゆっくりと考えてから結論をお出し頂ければと思います」

頭を上げて、微笑みながら話を続けた。

進藤

「ただ、我々は皆さんを歓迎したいと思っております」

不安に思っているだろう三人に、届くように。

湊音

「あ、ありがとうございます」

調

「恐縮です」

優陽

「……………」

こうして、三人の高校見学は終わった。
帰りの電車内は、三人とも無言だった。

◆霞ヶ浦湖畔

筑波の高校見学が終わったその足で、三人はいつもの場所にやって来た。そして、定番となっているベンチに並んで座った。

優陽 「どう、しようかな……」

滯音 「悩ましいよね……アクトレスになれるかもしれないけど、ちょっと違う感じだし……」

優陽 「……あたしさ、望まれているんだよね？ アクトレスの才能でも資質ではなく、実験の対象としてだけだよ」

滯音・調 「……………」

どこか投げやりな言い方に、滯音と調は何も言うことができなかった。だけど、優陽にそんな意図は全くなかった。

優陽

「だけど、そういった実験の繰り返しがあって、今のアクトレスがあるんだよね、きつと。だから、あたしがその実験に参加することで、未来のアクトレスのためになるんだよね？」

調

「そうだな。映画を作るためのカメラもPCも、そして、普段当たり前使っている道具だって、そういった実験の繰り返しで作られたものだからな」

滯音

「それに進藤さん、言ってたもんね。アクトレスへの情熱がある優陽だからこそ必要だって」

優陽

「アクトレスが好きじゃなきゃ、できないもんね。あたしがやることって」「いいや、少し言葉が間違っているな。優陽だからできることなんだよ」

滯音

「だね！」

優陽

「あはは、あたしだからできるのかあ！でも、ちょっとキツいなあ！」

優陽は笑ってはいたが、一方で内心は相当複雑な想いを抱えているこ

とを、二人は知っていた。

漣音

「キツイならさ、いつそのこと、全てを忘れちゃうのも手だよね？」

調

「そうだな。優陽の将来は優陽自身が決めることだ。誰にも文句を言われる筋合いはない」

漣音

「進藤さんも、ゆっくり考えて結論だせば良いって言ってたし。それって、進んでも戻っても、どっちでも良いってことだもんね」

優陽

「そうだね……」

漣音と調は、優陽が逃げる道を用意してくれている。

優陽はそれをわかった上で、二人の気持ちを確認しておきたかった。

優陽

「漣音ちゃんとしべちゃんはさ、筑波の高校、どう思った？」

漣音

「面白そうかなとは思った」

調

「ああ。アクトレスにならなくとも特進コースもあるみたいだし。あの



設備でアクトレスになるのも面白そうだし」

漣音 「でも……」

調 「ああ。私も漣音と同じ意見だ」

優陽 「え、どうということ?」

漣音 「優陽がいなきゃ、アクトレスになっても、つまらないでしょ?」

調 「そういうことだ」

優陽 「漣音ちゃん……しべちゃん……」

一瞬、ほんわかした空気に包まれたが、すぐに優陽は頭を抱えた。

優陽 「うわああああ! それって、あたし次第ってことじゃん!」

漣音 「あはは。そうとも言っ」

優陽 「ううう……責任重大だよ……」

調 「冗談だって。だけど、私達だって悩んでいるのは同じだぞ? 当初の

予定通り、土浦の高校に行くか、それとも筑波に行ってアクトレスに

なるか」

漣音 「どっちも魅力的だよね？ だから、優陽の意見も聞きたいってこと」

優陽 「うー」

なんか、うまく丸め込まれたような気がする優陽だった。

優陽 「進路って、しんどいね。たはは……」

頬をポリポリとかく姿は、いつもの優陽だった。

優陽 「でも……」うして悩めるのって、幸せでもあるよね？」

漣音 「うん、そうだね！」

「私達は、優陽がどんな結論を出しても賛成するよ。だから、好きな道を選べばいいよ」

優陽 「うん……」

優陽は改めて振り返った。

そして三人は、揃って夕陽を眺めていた。

空気がヒンヤリと冷えていく。

この空気を、あとどれだけ感じられるのだろうか？

春になれば新たな生活が始まる。

もしかしたら、三人はバラバラになってしまいかもしれない。

また一緒の学校に通っているかもしれない。

未来は誰にも分からない。

だからこそ、滯音は聞いておきたかった。

滯音

「ね、最後に聞いていい？　優陽にとってアクトレスって、なに？」

【選択】 優陽の答えは……？

《A 夢、かな？》

《B 希望、かな？》